

幼児教育の評価指標の検討

—カリフォルニア州DRDPと幼稚園教育要領領域「言葉」の比較検討—

○樟本千里 (岡山県立大学)
岩立京子 (東京学芸大学)

西坂小百合 (共立女子大学)

【問題と目的】

教育課程の編成には、「子どもの発達」の視点は重要である。そのためには、子どもを理解する、すなわち適切に評価することが重要である。適切な評価には適切な目標が必要であるが、現在の幼児教育においては、目標と教育内容と結果が理解しづらい。そこで、記録を中心としたエビデンスに基づいて教師が評定する教育指標のひとつである、米国、加州のDRDPシステムから、幼児版であるDRDP-PSを取り上げ日本の幼児教育を捉えなおすことを本研究の目的とした。特に、幼稚園教育要領の領域「言葉」をとりあげて検討を行うこととする。DRDP-PSの中には言葉に関連する領域として2領域があるが、その中で基礎的な言葉と読み書きの能力におけるすべての子どもたちの評価を行う領域である「Language and Literacy Development(LLD)」をとりあげ、幼稚園教育要領の領域「言葉」との対応を検討する。

【方 法】

DRDP-PSの中からLLDの領域の10指標を用いる。指標の日本語訳を行ったうえで、幼稚園教育要領の領域「言葉」の「内容」と「内容の取扱い」部分から対応する記述を抜き出し、検討する。

【結果と考察】

(1)Language and Literacy Developmentについて：本領域は10の指標から構成される (Table1)。各指標には4つの段階 (探索・発展・確立・統合) が設定されている (Table 2)。

(2)領域「言葉」との対応の検討：10の指標のうち、「7 活字に対する概念」を除く9の指標については、部分的に領域「言葉」の「内容」や「内容の取扱い」と重なる。例えば「指標3 言語を通した自己表現」については、内容「(2)したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。」、「(3)したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分か

らないことを尋ねたりする。」、「(5)生活の中で必要な言葉が分かり、使う。」と重なる。その一方でDRDPにおいては詳細な指標が設定されていると言える。例えば、幼稚園教育要領が、「自分なりに言葉で表現する」「尋ねる」「使う」と言う内容は、DRDPで設定されている4つの段階 (探索・発展・確立・統合) のいずれにも当てはまる。言いかえれば、どの水準で評価されているのか、年齢にふさわしい評価なのかは分かりづらいと言える。また、LLDと領域「言葉」の大きな違いは、読むことと書くことについて、LLDでは話すことと同様に扱われているのに対して、領域「言葉」では、あまり取り上げられていないと言える。幼児教育における読み書きの内容についても、今後一考する必要があると思われる。

Table1 LLD の 10 指標

指標
1 意味の理解
2 複雑な指示への従事
3 言葉を通した自己表現
4 会話の中の言葉
5 読み書き能力への関心
6 大人に提示された文章理解
7 活字に関する概念
8 音韻意識
9 文字と語の知識
10 書くことの出現

Table2 指標の定義と4つの段階の例

(measure3:Expression of self through language)

3 言語を通した自己表現
子どもは流暢に言葉を話すようになる
Exploring(探索) 基本的な考え(思い)と必要性を伝える句および短文を使う
Developing(発展) 名詞、動詞および最近学んだ語彙を含めて、3、5単語の文を使う
Building(確立) 比較的正確な言葉を使用し、より短い文の接続によりより長い文を作る
Integrating(統合) 想像上の出来事について記述するか、説明するか、あるいは予測するためにより複雑な言語あるいは語彙を使用する

付記 本研究は科研費 26381069 の助成を受けて行ったものである。